

病害虫発生予察情報予報第1号（5月の予報）

佐賀県

目次

1. 5月の病害虫	
2. 気象概要	1
3. 5月の予報	
<u>普通作物</u> （水稲）	3
<u>果樹</u> （カンキツ、ナシ、ブドウ、果樹全般）	6
<u>茶</u>	11
<u>野菜</u> （イチゴ、ナス、キュウリ、トマト、アスパラガス、タマネギ）	14
4. <u>病害虫診断状況</u>	24
5. <u>全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫</u>	25
6. <u>農薬の適正使用について</u>	26

今月のトピックス

タマネギべと病が圃場によって多く発生しています。[注意報第1号（平成26年4月4日発表）](#)を参考に、防除を徹底してください。

1. 5月の病害虫（予報で対象とした病害虫の中から抜粋）



水稲の葉いもち（矢印が病斑）



ナシ黒星病



イチゴのうどんこ病



チャのカンザワハダニ

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840-2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952) 45-8153 FAX (0952) 45-5085

2. 気象概要

【1ヶ月予報 平成26年4月24日 福岡管区気象台発表】

5月の天気は数日の周期で変わるでしょう。

5月の要素別確率（％）

要素	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	40	40	30
降水量	30	40	30

各病害虫の「予報の根拠」として、上記の5月の気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

上記の気象予報（確率予報）の内容について、本文中では便宜上、「気温並」、「降水量並」と簡略的に表現しています。

【参考】

要素	平年値 （佐賀市）	平年差（比）の平年並の範囲 （九州北部地方）
5月の平均気温	19.5℃	-0.3℃ ～ +0.3℃
5月の降水量	198.2mm	79% ～ 118%

3. 予報の内容・根拠等について

病害虫の発生量（平年比）

○予報の発生量は平年（佐賀県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

○留意点として、平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。一方、発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

予報の根拠

○予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

○それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

写真

○1ページ目には、予報で対象とした病害虫の写真を抜粋して掲載しています。

○3ページ目以降には、巡回調査圃場の写真を抜粋して掲載しています。

4. 5月の予報

普通作物

【概要】

作物名	病虫害名	発生量		病虫害防除のてびきの記載ページ	備考
		平年比	前年比		
水稲	いもち病	多	やや多	125～133 137～143	
	ばか苗病	並	並	125～133	
	イネミスヅウムシ	並	並	167～168 179～180	
	スクミリンゴガイ	並	並	173～175	

【特記事項】

1. いもち病の多発生が予想されることから、種籾の比重選と種子消毒を徹底する。
2. 育苗箱処理剤は施薬量が少ないと防除効果が低下するので、適正な量を処理する。

水稲

(巡回調査日：4月22日)



巡回調査時の生育状況（早期水稲）

1. いもち病（苗いもち）

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

平成25年の穂いもちの発生株率は、上場地域の早期水稲（8月上旬）で2.0%（平年5.0%）、北部山間の早植え水稲（9月上旬）で1.0%（平年9.3%）、普通期水稲（10月上旬）で13.2%（平年4.8%）であり、平年より早期、早植えはやや少なく、普通期は多かった。〈±～+〉

(2) 水稲籾のいもち病菌保菌率

県内各地から採取した平成25年産籾のいもち病菌保菌率は、早期水稲で0%（平年1.4%）、早植え水稲で4.5%（平年0.6%）、普通期水稲のウルチ品種で1.9%（平年0.4%）、普通期水稲のモチ品種で0%（平年0.3%）であった。早植え、普通期のうるち品種においては平年より高く（ここ十年で一番高い）、菌密度は高いと考えられる（表1）。〈+〉

表 1 平成25年産水稻粃のいもち病菌保菌率

作 型	品 種	調査圃場数	保菌粃率	平年 (保菌粃率)
早期水稻	コシヒカリ	12 圃場	0 %	1.4 %
早植え水稻	ウルチ品種	8	4.5	0.6
普通期水稻	ウルチ品種	17	1.9	0.4
	モチ品種	8	0	0.3

注) 各圃場ともに50粒の粃について、保菌状況を調べた。
保菌率の平年は平成16～24年産の平均値。

- (3) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
- (1) 比重選、種子消毒を徹底する。
- (2) 育苗箱で種粃が露出すると本病が発生しやすいため、覆土を適正に行う。

2. イネミズゾウムシ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
- (1) 前年の発生は平年よりやや少なく、越冬密度は平年よりやや少ないと考えられる。〈ー～±〉
- (2) 早期水稻（上場地域）の巡回調査では、0.3%の株で成虫の寄生を認めたが、食害は認めていない（食害株率：平年0.4%、前年0%）。〈±〉
- (3) 気象予報から、越冬後成虫の本田飛び込みの時期は平年並と予想される。〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
- (1) 前年発生が多かった地域では本虫に登録のある箱処理剤を施用する。
- (2) 越冬成虫は4月中旬～6月上旬に水田へ侵入する。本田での発生状況の把握に努め、成虫が10株当たり5頭以上みられたら、薬剤防除を行う。

3. スクミリンゴガイ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
- (1) 越冬状況
- ①平成26年4月に調査した用排水路における平均越冬生貝率は、21.6%と平年（56.3%）よりやや低かった（表2）。〈ー～±〉
- ②平成25年12月～平成26年2月の平均気温が6.74℃と平年（6.59℃）並であったことから、水田内での越冬生貝率は平年並と推定される。（図1：過去の冬期の気温と翌春の貝の越冬生貝率との解析の結果、両者の間に明確な正の相関が認められている。）〈±〉
- (2) 気象条件
気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
- (1) 用排水路・クレークにおいて密度の高い地域では、貝及び卵塊を捕殺する。
- (2) 発生圃場では、浅水管理を徹底する。
- (3) 発生が多い圃場では、薬剤防除を行う。

表2 用排水路におけるスクミリンゴガイの越冬生貝率の年次推移

(農業技術防除センター4月調査)

調査地点	越冬生貝率 (%)					
	H22年	H23年	H24年	H25年	H26年	H16～25年の平均b)
武雄市 (コンクリート水路)	95.0	13.5	31.0	81.7	29.7	—
鳥栖市 (コンクリート水路)	67.0	20.0	2.0	11.9	16.3	
白石町 (クレーク)	91.7	7.5	49.6	41.0	18.7	
川副町 (コンクリート水路)	89.2	— a)	— a)	— a)	—	
平均	85.7	13.7	27.5	44.9	21.6	56.3

a) 調査に必要な数を採集できなかった。

b) H16～25年の平均は56.3% (H15, 17-18年は県内5地点、H16, 19-22年は4地点、H23-6年は3地点を調査)。

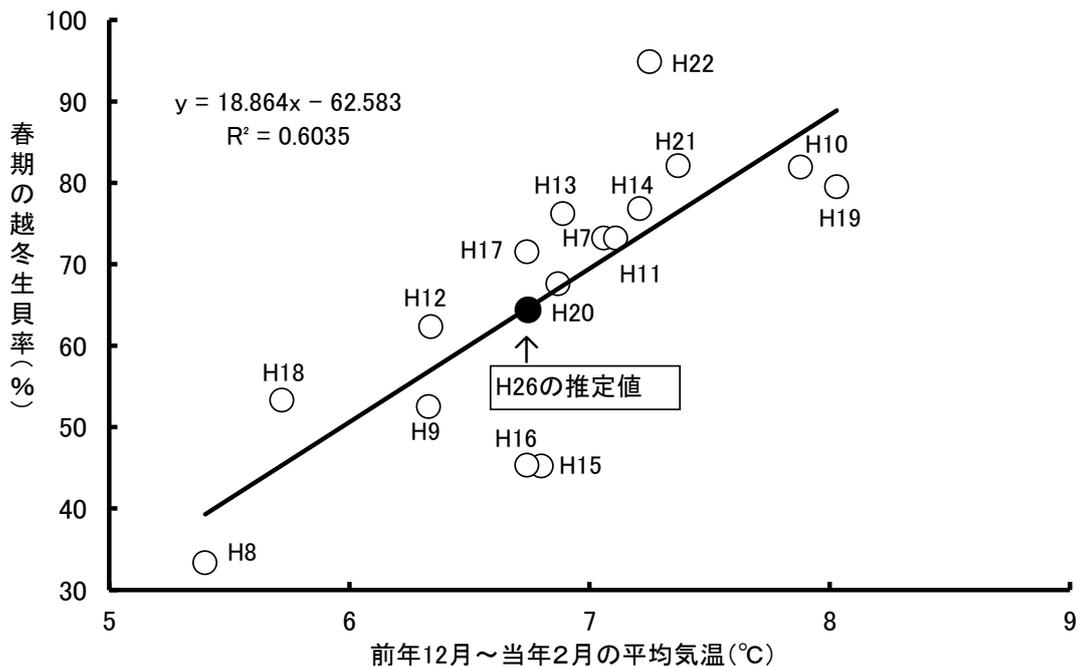


図1 冬期(12～2月)の平均気温と水田内でのスクミリンゴガイの越冬生貝率(4月)との関係

○: H7～H22の実測値(佐賀市の気温、川副町の同一水田における越冬生貝率)

●: H25年12月～H26年2月の気温を用いて上記の関係式から推定したH26年春季の越冬生貝率

果 樹

【概要】

作物名	病虫害名	発生量		病虫害防除 のてびきの 記載ページ	備 考
		平年比	前年比		
カンキツ	そうか病	並	並	216～218	
	かいよう病	やや少	並	220～222	
	灰色かび病	並	並	222～224	
	ミカンハダニ	並	やや多	244～247	
ナシ	黒星病	並	並	282～287	
ブドウ	黒とう病	並	並	322～324	
	べと病	並	並	326～328	
果樹全般	カメムシ類	並	多	カンキツ：251～254 ナシ：301～302 ブドウ：342	平成26年3月7日付け 病虫害対策資料第14 号参照

【特記事項】

[カンキツ]

- カンキツかいよう病が前年に発生した園や、風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅剤による防除を行う。

[ナシ]

- 黒星病の発病葉・果実は必ず除去し、園外で処分する。また、発病が認められない場合は保護殺菌剤を散布するが、発病が認められる場合や長雨で防除ができなかった場合はDMI剤による防除を行う。

[ブドウ]

- 大豆大の時期から袋かけ前まで、薬剤による果面の汚れや果粉の溶脱が発生しやすいため、小豆大の時期までの薬剤防除を徹底する。

[果樹全般]

- スピードプレイヤーで薬剤散布する場合は、全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなどして、丁寧に散布する。また、ナシ・ブドウにおいて手散布する場合は、薬液が十分かかるように棚の上下両方向から行う。
- 気温の上昇に伴い、カメムシ類が、カンキツ（開花期以降）、ナシ、ウメ、モモなどでは園によって飛来する場合がありますので注意する。

カンキツ

(調査日：4月17日～22日)



巡回調査時の生育状況

1. そうか病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、温州みかんでの発病を認めていない。（発病葉率：平年0.1%、前年0%）〈±〉

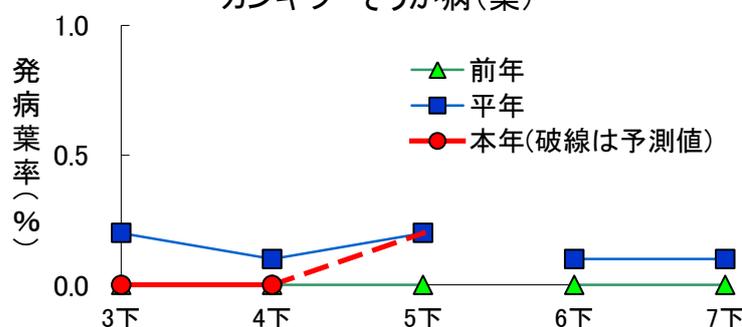
(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)果実への感染を防止するためには落弁期の防除が重要である。

(2)果実に葉害を生じる場合があるため、落弁期以降にデランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。

カンキツ そうか病(葉)



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、温州みかんでの発病を認めていない。（発病葉率：平年0.6%、前年0%）〈-～±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

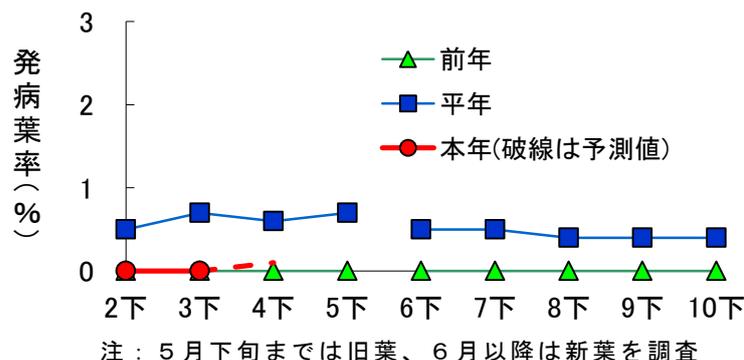
(1)本病が前年に発生した園や、風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅剤による防除を行う。

(2)無機銅水和剤（クレフノン200倍加用）またはICボルドー66D（アビオンE1,000倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安はクレフノン200倍加用無機銅水和剤で20～25日で、ICボルドー66Dの場合は30日とする。

(3)ICボルドー66Dは、展葉期に単剤で散布すると、葉に石灰による葉害が発生するので、散布する際はアビオンE1,000倍を必ず加用する。

(4)発病した枝や葉は今後の伝染源となるので除去する。ただし、強剪定については枝が遅くまで伸長し、本病にかかりやすい期間が長くなるので行わない。

カンキツ かいよう病(葉)



ナシ

(調査日：4月18日)



巡回調査時の生育状況

1. 黒星病

1) 予報の内容

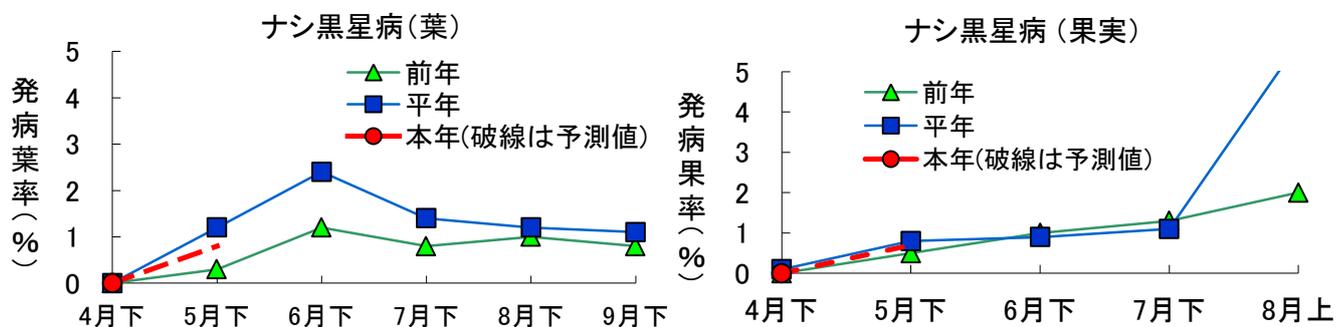
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発病葉、発病果を認めていない（発病葉率：平年0%、前年0%、発病果率：平年0.1%、前年0%）。〈±〉
- (2)本病の主要感染期である開花期前後（4月1日～20日）の平均気温は平年並（13.2℃、本年12.8℃、前年12.5℃）で、降雨量は平年よりやや少なく（本年74mm、平年121mm、前年104mm）、感染にやや不適な条件で推移した。（※気象データは伊万里観測所の値）〈-～±〉
- (3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)DMI剤耐性菌の発生を防止するために、5～6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用する（薬剤は施肥・病害虫防除・雑草防除のてびきP284～P286を参照）。ただし、発病が認められた場合や長雨等で薬剤散布ができなかった場合はDMI剤を散布する。
- (2)スピードスプレーヤーで薬剤散布する場合は、全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなどして、丁寧に散布する。



ブドウ

(調査日：4月18日～22日)



巡回調査時の生育状況

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、葉での発病を認めていない（発病葉率：平年0%、前年0%）。〈±〉

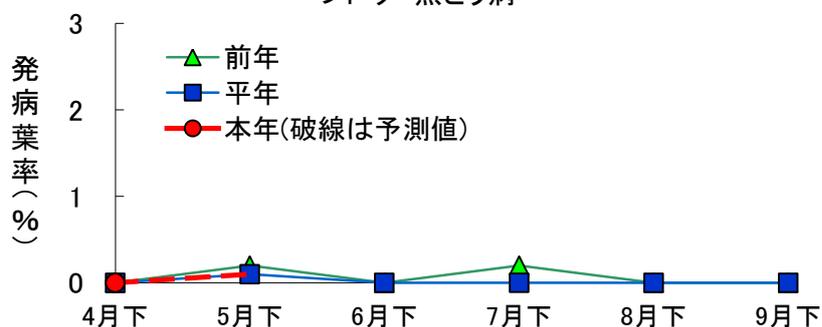
(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)罹病枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

(2)新梢葉への感染を防ぐため、萌芽期～新梢伸長期に防除を行う。

ブドウ 黒とう病



2. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

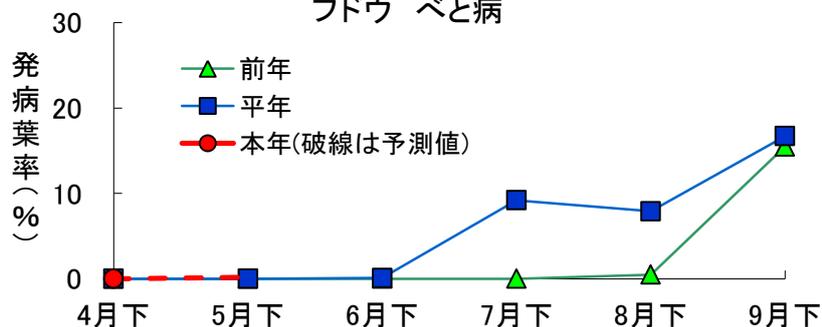
(1)巡回調査では、葉での発病は認めていない（発病葉率：平年0%、前年0%）。〈±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)降雨により感染が進展するため、降雨前の予防散布を行う。

ブドウ ベと病



果樹全般

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 平成26年1月に常緑広葉樹林の落葉中におけるチャバネアオカメムシ成虫の越冬状況を県内22地点で調査した結果、0.30頭/m²（平年 0.48頭/m²、前年 0.06頭/m²）で、平年並で前年より多い（図1～図2、表1）。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果樹カメムシ類の飛来については、ナシ、ウメ、モモなどで特に注意する。
- (2) 果樹カメムシ類は樹高の高い樹木に一度飛来して、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くならないように剪除する。
- (3) その他詳細については、[平成26年3月7日付け病害虫対策資料第14号](#)を参照する。

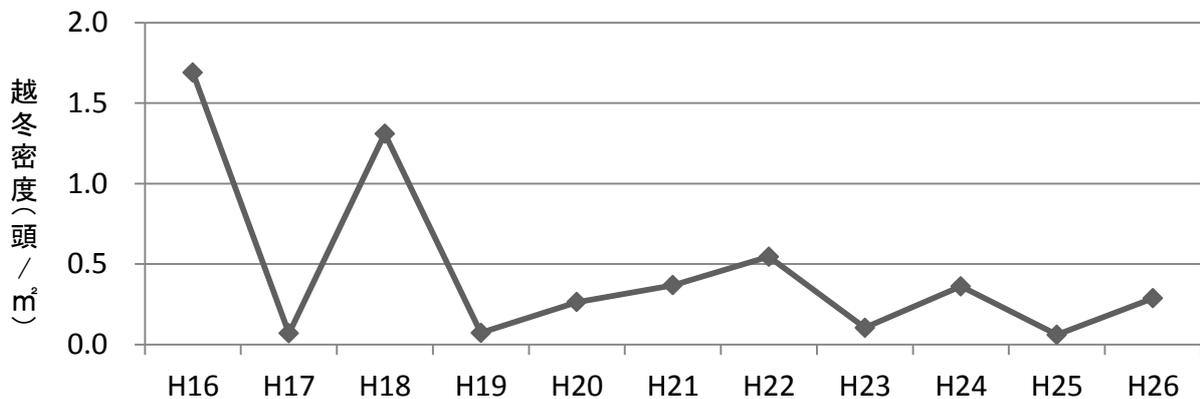


図1 チャバネアオカメムシの越冬密度の年次別推移

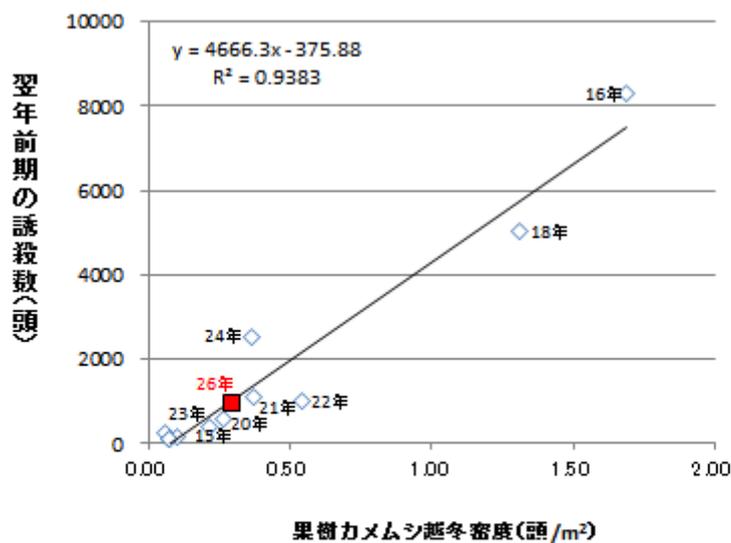


図2 果樹カメムシの越冬密度と翌年前期の誘殺数¹⁾との関係

- 1) 翌年前期の誘殺数とは、県内に設置された予察灯3台による5月上旬～8月上旬の平均誘殺数を示す
 - ◇平成15～25年度のデータ(平成17、19、25年については極少発生のため表記を省略)
 - 平成26年の予想値

表1 県内各地におけるチャバネアオカメムシの越冬密度の年次別推移(単位:頭/m²)

No.	調査地域	平成16年	平成17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年
1	みやき町	-	-	-	0.3	0	0	3.0	0	0	0	0
2	吉野ヶ里町	1.5	0.2	1.7	0	1.0	1.0	0	0	0	0	0
3	神崎市	0	0.3	0	0	0.3	0.3	0	0.3	0.7	0	3.0
4	佐賀市	1.8	0	1.2	0	0.3	0.7	0.3	0	0	0	0
5	小城市	0.3	0	0.3	0.3	0.3	0.3	0	0	0	0	0
6	多久市1	0.5	0	0.3	0.2	0.8	0.3	0.7	0	0	0	0
7	多久市2	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0
8	唐津市1	0.9	0	1.2	0	0	0	0	0	0	0	0
9	唐津市2	-	-	-	-	-	0.3	0	0	0	0	0
10	唐津市3	-	-	-	-	-	0.3	0	0	0	0	0
11	伊万里市1	1.2	0	2.2	0	0	0.3	0	0	0	0	0
12	伊万里市2	-	-	-	-	-	0.7	0.7	0	0.3	0	0
13	伊万里市3	-	-	-	-	-	1.3	0.7	0	1.0	0	1.0
14	武雄市1	7.3	0	3.3	0	0	0.3	0	0	1.3	0.3	0
15	武雄市2	-	-	-	-	-	0	0.3	0	0.3	0	0.7
16	鹿島市1	1.3	0.2	1.4	0	0	0.3	0.7	0	0.3	0	0
17	鹿島市2	-	-	-	-	-	0.3	0.7	0.3	0	0	0
18	鹿島市3	-	-	-	-	-	0.3	0.3	0	1.0	0.3	0
19	太良町1	2.1	0	1.5	0	0	0.0	0.7	0.3	0.7	0.3	0
20	太良町2	-	-	-	-	-	0.7	0.7	0.3	0.7	0.3	0
21	太良町3	-	-	-	-	-	0.7	2.3	0.7	1.0	0	0
22	太良町4	-	-	-	-	-	0	1.0	0	0.7	0	0
平均越冬虫数 ^{a)}		1.69	0.07	1.3	0.07	0.26	0.37	0.55	0.10	0.36	0.06	0.30
平年値 ^{b)}												0.48

a) 全調査地点の越冬虫数の平均値

b) 平成16年～25年の越冬虫数の平均値

茶

【概要】

作物名	病害虫名	発生量		病害虫防除のてびきの記載ページ	備考
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	やや少	少	397～398	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	403～404	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	402～403	

【特記事項】

1. 県内においてチャトゲコナジラムシの発生が確認されている。疑わしい葉が見つかった場合には、すぐに関係機関へ連絡する。(平成26年4月9日付け病害虫発生予察情報特殊報第1号参照)
2. 被覆栽培はカンザワハダニの発生を助長する傾向にある。発生が多くみられる園では一番茶摘採後に防除を徹底する。
3. 5月中～下旬にかけては、チャノミドリヒメヨコバイおよびチャノキイロアザミウマの発生が増加する時期であるため、一番茶摘採後、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する。
4. クワシロカイガラムシの幼虫ふ化期は5月中～下旬である。園内のふ化状況を観察し、ふ化最盛期に適期防除を行う。
5. ナガチャコガネは、二番茶の萌芽開葉初期（5月下旬～6月中旬頃）に、防除適期である羽化期～成虫飛来初期を迎えるため、摘採前使用日数に注意して防除を行う。

茶

(巡回調査：4月17～22日)



巡回調査時の生育状況

1. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：やや少ない（前年より少ない）

2) 予報の根拠

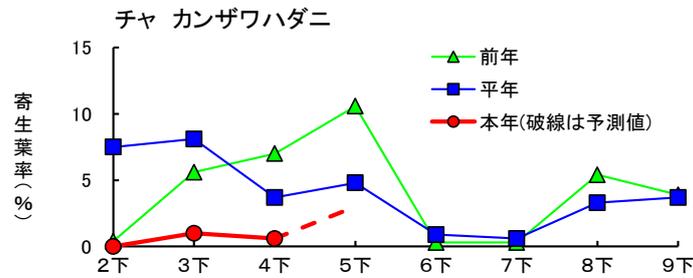
(1) 巡回調査では、寄生株率0.6%（平年3.7%、前年7.0%）であり、平年及び前年より少ない。〈－〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤は年一回の使用とする。



2. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

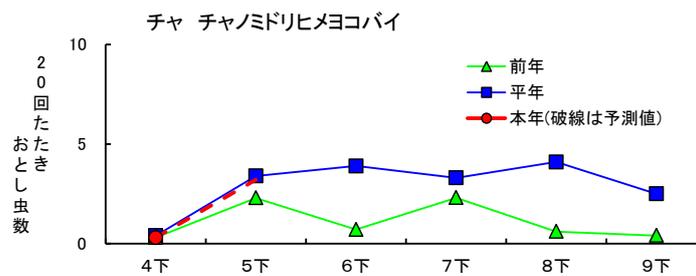
(1)巡回調査では、20回たたき落とし虫数は0.3頭（平年0.4頭、前年0.3頭）であり、平年及び前年並である。〈±〉

(2)気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)一番茶摘採残葉や遅れ芽に生息し、二番茶生育期の発生源となるため、一番茶摘採後に防除する。

(2)幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。



3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、20回たたき落とし虫数は0.9頭（平年2.6頭、前年0.1頭）で、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉

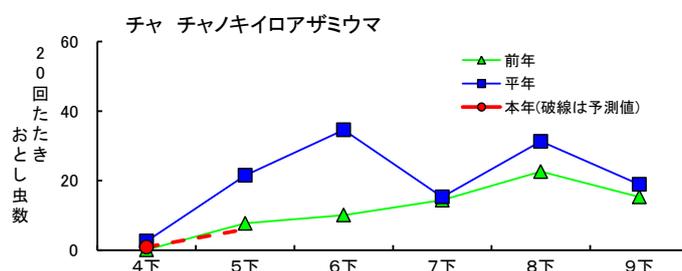
(2)気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)一番茶摘採残葉や遅れ芽に生息し、二番茶生育期の発生源となるため、一番茶摘採後に防除する。

(2)幼虫は葉裏に生息することが多いので、葉裏にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



野 菜

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除の てびき記載頁	備 考
		平年比	前年比		
イチゴ (本園)	うどんこ病	並	やや多	183～186	
	ハダニ類	やや少	並	194～195	
	アブラムシ類	並	並	199～200	
イチゴ (育苗園)	うどんこ病	やや少	やや多	183～186	4月25日付け病害虫 対策資料第1号参照
	ハダニ類	やや多	多	194～195	
	アブラムシ類	やや少	少	199～200	
ナス	すすかび病	並	並	227～228	
	灰色かび病	やや少	並	226～227	
	アザミウマ類	並	やや少	237～238	
	コナジラミ類	やや少	並	236	
	ハモグリバエ類	やや少	並	239	
キュウリ (半促成)	べと病	やや多	並	161～163	
	うどんこ病	やや少	並	168～170	
	灰色かび病	並	並	163～164	
	褐斑病	並	多	165～166	
	アザミウマ類	やや多	並	178～179	
	コナジラミ類	やや少	並	176～177	
トマト	灰色かび病	並	やや多	205～207	
	葉かび病	並	やや多	211～212	
	コナジラミ類	多	多	214～216	
	ハモグリバエ類	並	やや多	217～218	
アスパラ ガス	褐斑病	並	並	292～293	
	斑点病	並	並	292	
	アザミウマ類	やや多	やや多	294	
	アブラムシ類	並	やや少	295	
タマネギ (本園)	べと病	多	やや多	266～267	平成26年4月4日付け 病害虫発生予察注意 報第1号参照
	ホトリチス葉枯症	並	並	268	
	ネギアザミウマ	並	並	273～274	

【特記事項】

1. イチゴうどんこ病については、子苗への伝染を防ぐため、親株の防除を徹底する（[4月25日付け病害虫対策資料第1号](#)参照）。
2. イチゴの炭疽病については、ビニル雨よけや水滴の小さい灌水装置を利用して、水はねによる菌の飛散を防ぐとともに、親株からの定期的な薬剤防除を徹底する（[4月25日付け病害虫対策資料第1号](#)参照）。
3. 施設野菜類のアザミウマ類やコナジラミ類は、気温の上昇とともに急激に増加するため、防除を徹底する。また、圃場においてこれらが媒介するウイルス病の発生がみられる場合は、伝染源となるため早急に抜き取り、圃場外へ持ち出し適切に処分する。栽培終了後はアザミウマ類等が圃場外へ飛び出さないよう、ハウス密閉処理を行う。
4. 多発生したべと病が周辺圃場の感染源になる場合があるので、防除対策を地域全体で取り組む。（[平成26年4月4日付け病害虫発生予察注意報第1号](#)参照）。

イチゴ（本圃）

（巡回調査：4月16日～22日）



巡回調査時の生育状況

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は11.0%（平年10.8%、前年5.0%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉

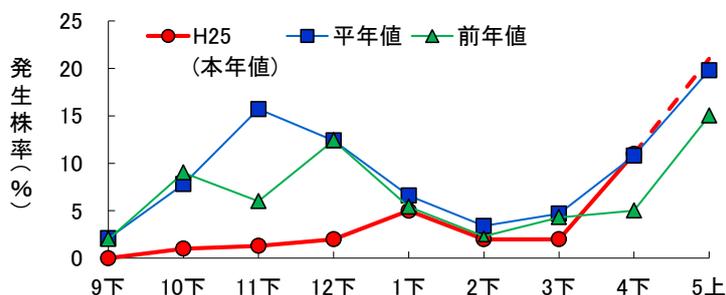
(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)古葉等を除去し、葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように散布する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

イチゴ うどんこ病



2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

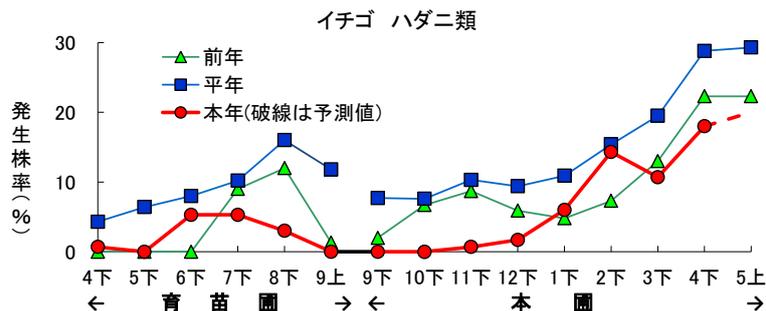
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は18.0%（平年28.8%、前年22.3%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-～±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



イチゴ（育苗圃）

（巡回調査：4月16日～22日）



巡回調査時の生育状況

1. うどんこ病

1) 予報の内容

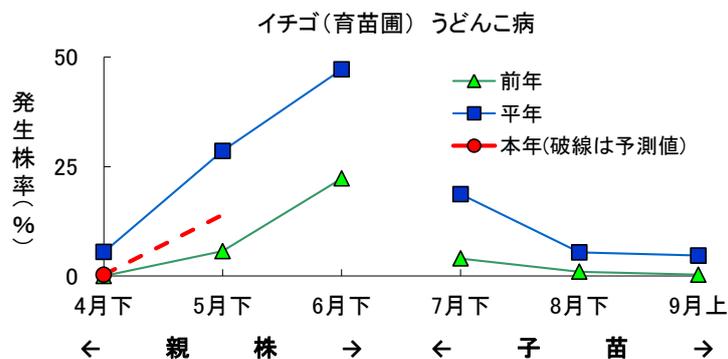
発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は0.3%（平年5.5%、前年0%）であり、平年より少なく前年並である。〈-〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏にも薬液が十分かかるように散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

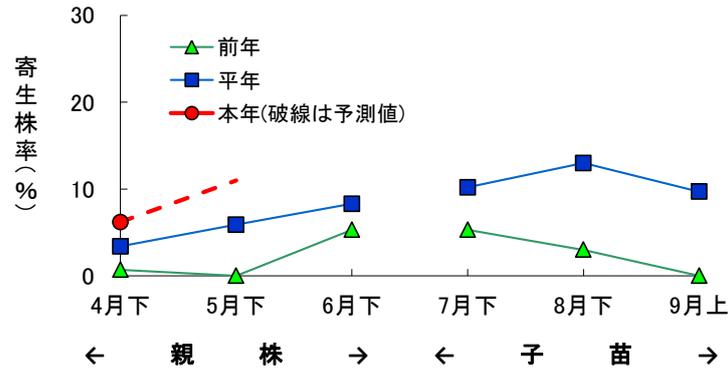
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は6.2%（平年3.4%、前年0.7%）であり、平年よりやや多く前年より多い。〈±~+〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本種は薬液のかかりにくい葉裏や下位葉に寄生していることが多いので、薬液が十分かかるよう散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

イチゴ(育苗圃) ハダニ類



ナス (促成) (巡回調査: 4月17~19日)



巡回調査時の生育状況

1. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

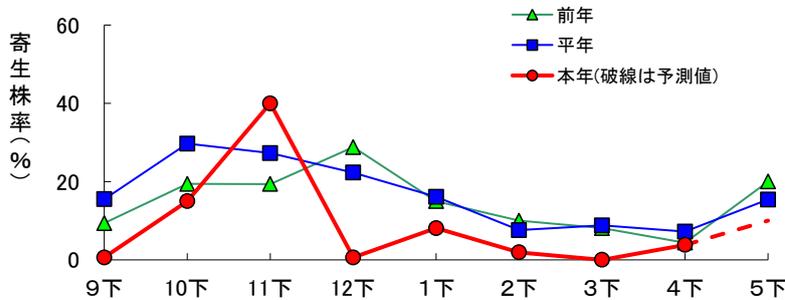
(1) 巡回調査では、寄生株率は3.8% (平年7.2%、前年4.4%) であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉

(2) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

ナス アザミウマ類



2. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや少ない (前年並)

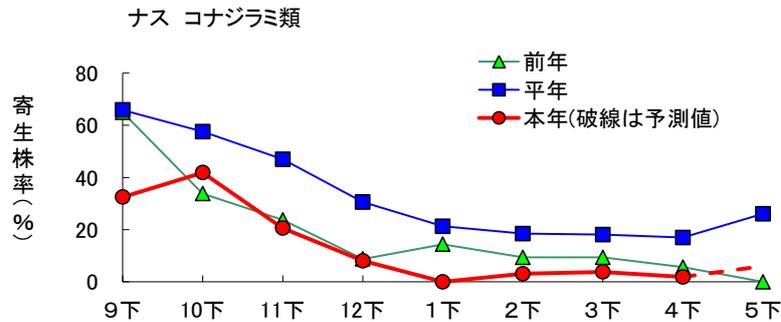
2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は1.9% (平年17.0%、前年5.6%) であり、平年より少なく前年並である。〈-〉

(2) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内の密度を下げるため、幼虫寄生葉は可能な限り除去して、施設外へ持ち出して適切に処分する。
- (2) 葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



キュウリ(半促成)

(巡回調査：4月18日～21日)



巡回調査時の生育状況

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い(前年並)

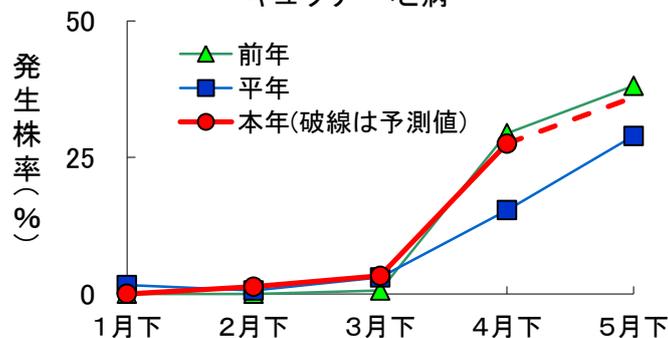
2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は27.5%(平年15.3%、前年29.4%)であり、平年よりやや多く前年並である。〈±～+〉
- (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)こまめな換気や循環扇を活用するなどして、施設内の温湿度を適切に管理し、結露時間の短縮に努める。
- (2)肥料切れや着果負担による草勢の低下が起きないように適切な肥培管理を行う。
- (3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

キュウリ ベと病



2. うどんこ病

1) 予報の内容

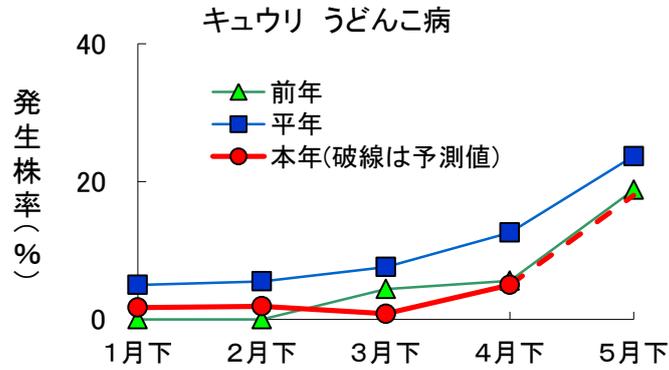
発生量：平年よりやや少ない(前年並)

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は5.0%(平年12.6%、前年5.6%)であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-～±〉
- (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発生初期からの防除を徹底する。
- (2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



3. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より多い）

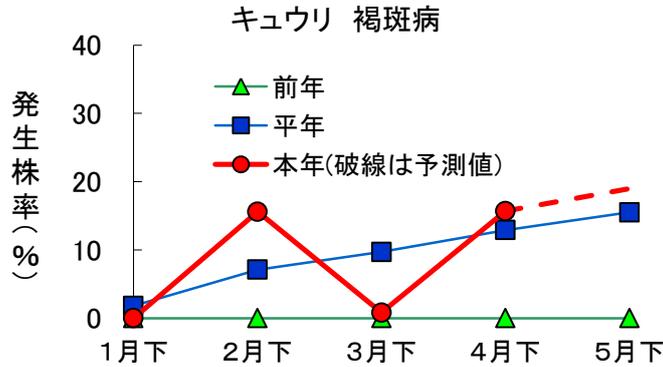
2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、発生株率は15.7%（平年12.9%、前年0%）であり、平年並で前年より多い。〈±〜+〉

(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



4. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生株率は13.8%（平年6.6%、前年11.9%）であり、平年よりやや多く前年並である。〈±〜+〉

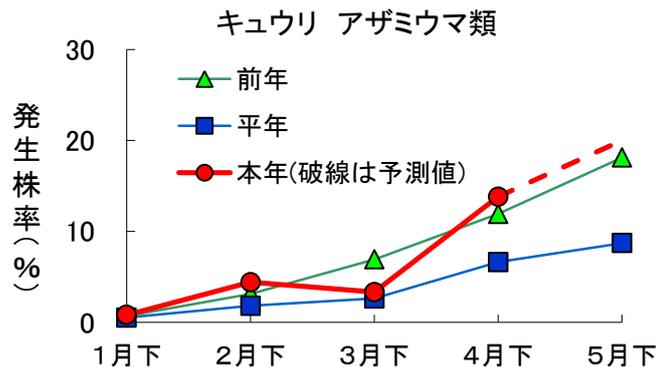
(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病を媒介するため、防除を徹底する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

(3) 圃場外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後はハウス密閉処理を実施する。



5. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

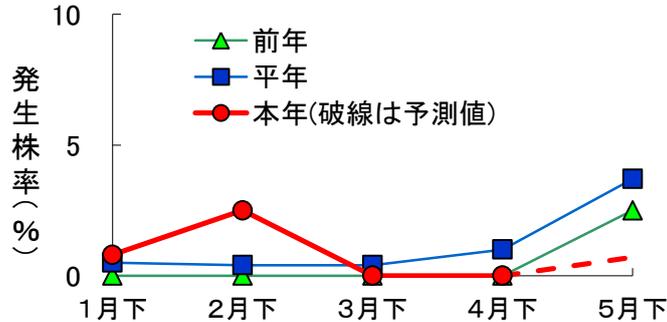
(1)巡回調査では、寄生を認めていない（寄生株率：平年1.0%、前年0%）。〈-~±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)圃場外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後はハウス密閉処理を実施する。

キュウリ コナジラミ類



トマト

(巡回調査：4月16日～22日)



巡回調査時の生育状況

1. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は9.4%（平年4.9%、前年3.8%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉

(2)病害虫防除員の調査（2圃場）では、2圃場で発生がみられ、寄生株率は15.0%である。〈+〉

(3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

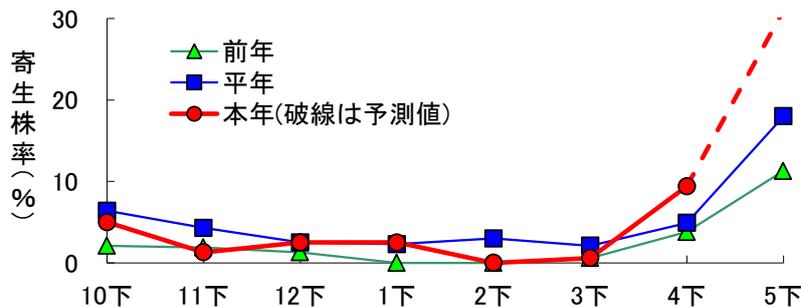
3) 防除上注意すべき事項

(1)コナジラミ類はトマト黄化葉巻病を媒介するため、防除を徹底するとともに、圃場外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後はハウス密閉処理を実施する。

(2)幼虫寄生の多い葉は除去処分し、葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう散布する。

(3)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

トマト コナジラミ類



アスパラガス

(巡回調査：4月16日～22日)



巡回調査時の生育状況

1. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

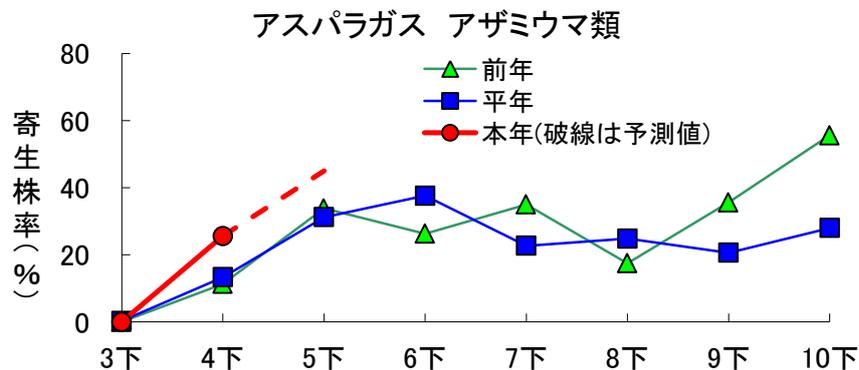
(1)巡回調査では、寄生株率は25.6%（平年13.3%、前年11.3%）であり、平年及び前年よりやや多い。〈±～+〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難であるため、低密度時からの防除を徹底する。

(2)薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。



タマネギ（本圃）

(巡回調査日：4月16～21日)



巡回調査時の生育状況

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、露地圃場の発生株率が23.3%（平年6.7%、前年44.3%）であり、平年より多く前年並である。〈+〉

(2)露地圃場での発生状況は圃場ごとに異なっているが、多発生圃場が一部で見られる（表1）。〈±～+〉

(3)気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)多発生したべと病が周辺圃場の感染源になる場合があるので、防除対策を地域全体で取り組む。

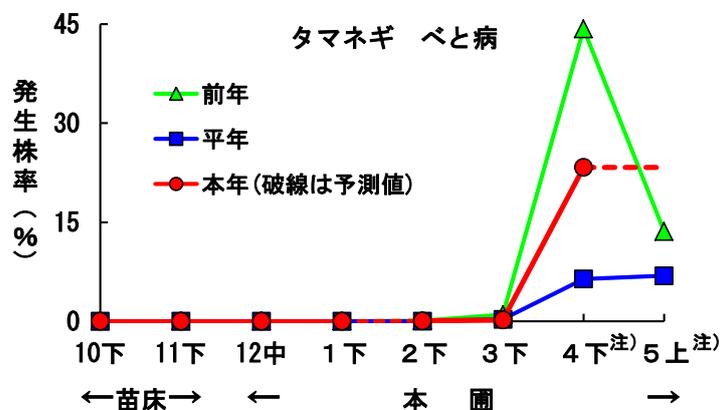
(2)発病株は貯蔵中の腐敗の原因となるため、立毛中の防除を徹底する。

(3)薬剤が葉に確実に付着するよう、十分量を丁寧に散布する。

(4)詳細な防除対策は、[平成26年4月4日付け病害虫発生予察注意報第1号](#)を参照する。

表1 タマネギ巡回調査圃場におけるべと病発生程度別圃場数（4月16～21日：露地圃場）

発生株率（％）	0～20	20～40	40～60	60～80	80～100	計
圃場数	8	3	0	1	1	13



注)4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査

2. ボトリチス葉枯症

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

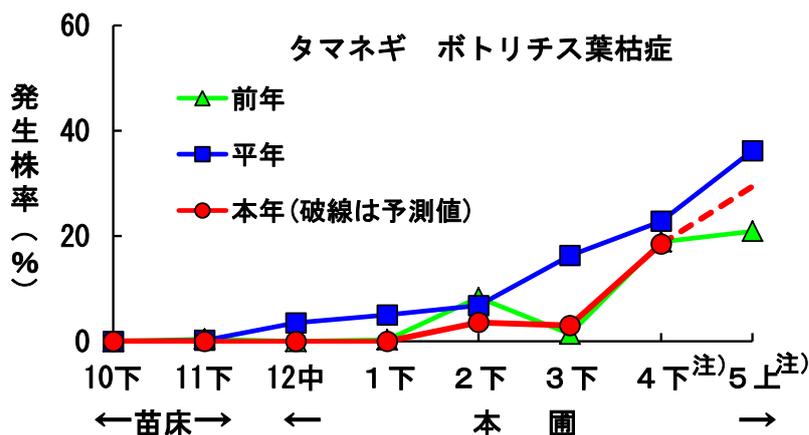
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は18.5%（平年22.8%、前年18.9%）であり、平年および前年並である。〈±〉

(2)気象予報では、並発生条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

本病は貯蔵中の腐敗の原因となるため、立毛中の防除を徹底する。



注)4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査

3. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

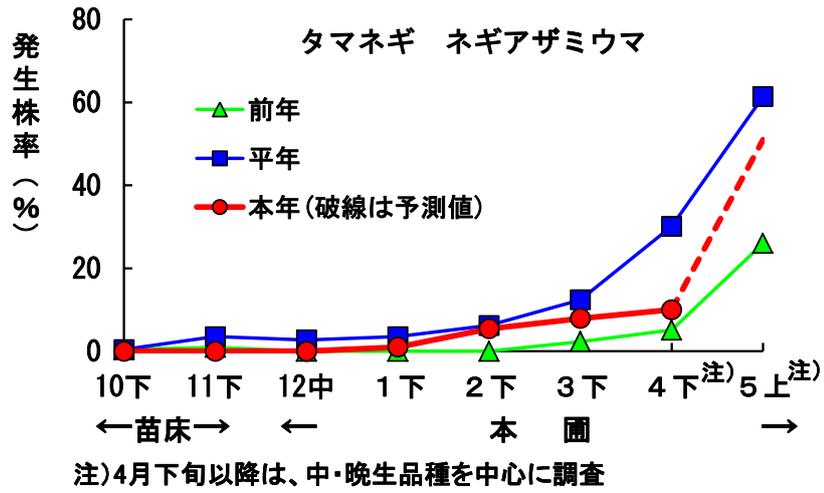
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、寄生株率は10.0%（平年30.1%、前年5.1%）であり、平年よりやや少なく前年よりやや多い。〈-～±〉

(2)気象予報では並発生条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

本虫の食害痕は貯蔵中の腐敗を助長するため、立毛中の防除を徹底する。



5. 病害虫等診断依頼状況

平成26年3月21日～平成26年4月20日までに農業技術防除センター及び各試験研究機関に持ち込まれ、同期間中に診断が完了した病害虫の診断結果は次のとおりです。

作物名	依頼件数	診断結果(件数)
普通作	計	0
果樹	ハウスミカン	1 ハマキムシ類(1)
	ブルーベリー	1 灰色かび病(1)
	計	2
野菜	イチゴ	2 生理障害等(2)
	オクラ	1 苗立枯病(1)
	キュウリ	4 黄化えそ病(2)、つる枯病(1)、生理障害等(1)
	シロウリ	1 生理障害等(1)
	タカナ	2 生理障害等(2)
	タマネギ	8 腐敗病(3)、べと病(1)、生理障害等(4)
	チンゲンサイ	1 腐敗病(1)
	トマト	4 葉かび病(1)、菌核病(1)、生理障害等(2)
	ミニトマト	2 青枯病(2)
	ナス	2 うどんこ病(1)、生理障害等(1)
	ハウレンソウ	2 生理障害等(2)
	レタス	1 生理障害等(1)
	レンコン	1 生理障害等(1)
	計	31
花き	ペゴニア	3 斑点細菌病(1)、株腐病(1)、葉枯線虫病(1)
	キク	1 えそ病(1)
	トルコギキョウ	1 生理障害等(1)
	ホオズキ	6 モザイク病(2)、生理障害等(4)
	計	11

合計： 20 作物
44 件

内訳	糸状菌による病害	: 8件
	細菌による病害	: 7件
	ウイルス・ウイロイドによる病害	: 5件
	害虫類	: 1件
	線虫類	: 1件
	生理障害等	: 22件
	合計	40件

6. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に3月25日～4月21日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）				
発信元	内容	日付	作物	病害虫名
群馬県	注意報	2014/03/25	水稲	イネ縞葉枯病
埼玉県	注意報	2014/03/26	ツバキ・サザンカ・サキ	チャトゲコナジラミ
埼玉県	注意報	2014/04/01	水稲	イネ縞葉枯病
佐賀県	注意報	2014/04/04	たまねぎ	べと病
愛知県	注意報	2014/04/04	ウメ・モモ・ナシ・ブドウ・ カキ	果樹カメムシ類
愛媛県	注意報	2014/04/08	麦類	赤かび病
静岡県	注意報	2014/04/09	落葉果樹、びわ、 かんきつ	果樹カメムシ類
和歌山県	注意報	2014/04/14	ウメ・モモ・スモモ・カキ・ カンキツ	果樹カメムシ類
大分県	注意報	2014/04/18	麦類	赤かび病

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）			
発信元	日付	作物	内容
宮崎県	2014/03/31	ピーマン	モトジロアザミウマ
佐賀県	2014/04/09	チャ	チャトゲコナジラミ

技術情報等（九州地方で発表されたもののみ）			
発信元	日付	作物	内容
佐賀県	2014/03/26	たまねぎ	べと病の防除徹底について
佐賀県	2014/03/26	麦類	赤かび病の適期防除について
長崎県	2014/03/27	麦類	赤かび病の防除対策について
熊本県	2014/04/01	いぐさ	イグサシンムシガの越冬調査結果について
福岡県	2014/04/01	ナシ	赤星病の防除適期について
福岡県	2014/04/03	麦類	赤かび病の防除適期について
長崎県	2014/04/03	ばれいしょ	疫病の防除対策について
長崎県	2014/04/15	水稲	ヒメトビウンカの越冬量及び保毒状況

7. 農薬の適正使用を徹底しましょう！

水稻育苗箱に農薬を施用する場合は、**農薬が育苗箱からこぼれ落ちないように、畦畔等で行うか、育苗箱の下に不浸透性のビニルを敷く等の対策**をとり、散布しましょう。

**農薬の使用にあたっては、
以下のルールを必ず
守りましょう！**



**農薬は、登録農薬を適切に
使用しましょう！**

登録農薬にはラベルに「農林水産省登録第〇〇号」と書いてありますので、使用する前に必ず確認し、ラベルに書いてある農薬の使用基準を必ず守りましょう。

農林水産省登録
第〇〇〇〇〇号

ラベルの内容

- 作物名(使用できる作物の種類はどれか)
- 使用濃度、希釈倍率または使用量
- 使用時期(いつ、又はいつまで使用できるのか)
- 総使用回数(何回まで使用できるのか)等



(佐賀県植物防疫協会パンフレットより)